文焦点（Thetic）文における主題標示とその条件の再検討 宮崎県椎葉村尾前方言を中心に

九州大学大学院/JSPS/NINJAL
廣澤尚之
https://researchmap.jp/naoyuki_h

researchmap

要旨

✓尾前方言は文焦点（Thetic）文の一部で主語が主題助詞を取る

✓これまでに分かっていたこと
（①か②のいずれかを満たすとき主題助詞が出現）
①主語が文脈に既出のとき
②存在（Presentational）ではなく出来事を表す（Event-reporting）文

✓本発表で明らかにすること
①の「既出」だけでない、より多様な「旧情報」が絡んでいる
②にはアスペクトの制限がある

1. 前提

文焦点（Thetic）

文全体が焦点（＝前提との差異になる部分/新情報）な文がある

(1) a. 車はどうしたの？
車は故障したよ。　述語焦点

b. バイクが故障したの？
いや、車が故障したんだよ。　項焦点

c. 何が起きたの？
車が故障したんだよ。　文焦点

＊諸言語での振る舞いはSasse (1987, 2006), Lambrecht (2000)

文焦点（Thetic）

主題-コメントの構造を持たない（Lambrecht 2000）
出現する文脈が特異的である（Macias 2016, Sasse 2006）

(2) a. 存在・消滅 HERE's John.
b. 天候 It is snowing.
c. ニュース The POPE died.

しばしばout of blueな文と言われる（cf. Sax 2012）
談話に話題を導入する文でもある（Lambrecht1994: 185）

本発表の対象

- 文焦点/Theticを厳密に同定できる基準は存在しない（Sasse 2006)

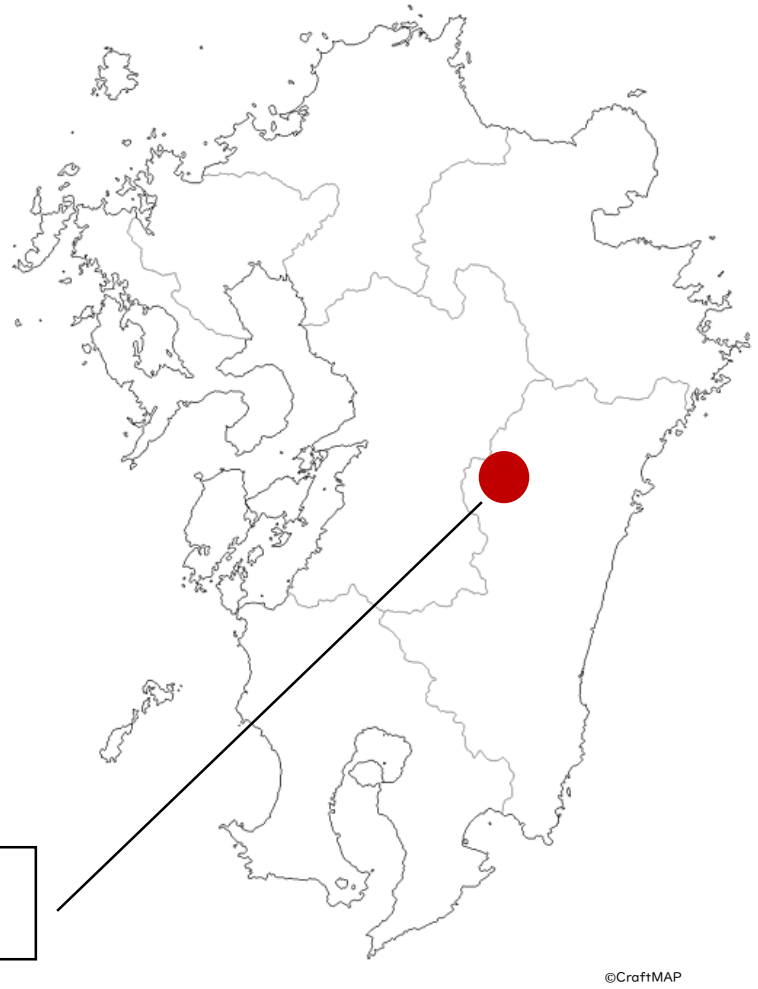
本発表で対象とする文
通言語的に文焦点/Theticになりやすい以下のような文を扱う。

(2) a. 存在・消滅 HERE's John.
b. 天候 It is snowing.
c. ニュース The POPE died.

日本語学で「現象文」（三尾 1948: 64, 仁田1991: 122）や
「存現文」（佐治1991）と呼ばれる文

宮崎県椎葉村尾前方言

- 宮崎県東臼杵郡椎葉村の西北部
  - 人口約100人
- 系統未詳
  - 九州方言ー豊日方言ー日向方言（北部）
- 女性話者一人へ実地調査



宮崎県椎葉村

主題助詞「ワ」

本発表では「ワ」は音韻融合していない形で示します。

- 日本語の主題助詞 「は」と同根。

(3) オレワ　元気バイ。　（私は元気です。）

- 主語に「ワ」がつくのは基本的に述語焦点で、文焦点にはつかない。

(4)	a.	「タクシー来た？」と聞かれて
		ハイヤーワ　　来タゼ。（タクシー来たよ。）
	b.	不意にきたタクシーを見て
		ハイヤー{ノ/*ワ}　来タゼ。（タクシー来たよ。）

文焦点の一部は主語をwaで標示できる。

＊以下のスライドでは、特に必要がない限り焦点領域の下線を省略する。

(5)	a.	不意に来たタクシーを見て
		ハイヤー{ノ/*ワ}　来タゼ。（タクシー来たよ。）
	b.	呼んだタクシーを待っていて、見つける
		ハイヤー{ノ/ワ}　来タゼ。（タクシー来たよ。）

先行研究
（三井2020）

文焦点の一部は主語をwaで標示できる。

(6)	a.	電話が鳴ったので家人に伝える
		電話{ノ/*ワ}　鳴リウォルゴタルガ。（電話が鳴ってるみたいだよ。）
	b.	時計が止まっているので家人に教える
		時計{ノ/ワ}　止マットルフー。（時計が止まってるようだよ。）

先行研究
（廣澤2023ab,
廣澤他近刊）

文焦点文の一部は主語をwaで標示できる。

(7)	a.	足元に誰かの筆箱を見つけて
		アレ　筆入レ{ノ/*ワ}　アル。（あれ、筆箱がある。）
	b.	足元に聞き手の筆箱を見つけて呼び止める
		アレ　筆入レ{ノ/ワ}　アル。（あれ、筆箱がある。）

2. 従来の研究

文焦点でも主題助詞

(8)	道端で唐突に
	タバコ={ガ/ノ/ワ/Ø}　アルカイ。（タバコある？）(三井2020:2)
(9)	タクシーを探していて
	タクシー={Ø/ワ/ガ/ノ}　オッタ。（あ、タクシーいた。）(ibid.)

三井（2020）

- 現象文 (仁田1991)（≒文焦点文）でも有題文なら「ワ」を取れる。
- これらは標準語の「ハもガも使えない文」(尾上1987, 大谷1995)

出現条件の記述

(8)	道端で唐突に
	タバコ={ガ/ノ/ワ/Ø}　アルカイ。（タバコある？）(三井2020:2)
(9)	タクシーを探していて
	タクシー={Ø/ワ/ガ/ノ}　オッタ。（あ、タクシーいた。）(ibid.)

三井（2020）

- 現象文 (仁田1991)（≒文焦点文）でも有題文なら「ワ」を取れる。

Shimoji & Hirosawa（2022）

- 主題構造でなくても、主語が活性化していれば「ワ」を取れる。

活性化は必須か？

(10)	a.	家に遊びに来てくれた友人が帰宅する。タクシーを呼んだが、なかなか来ない。友人と「タクシーいつ来るかな」と話している。（活性化あり）
		ア　ハイヤー{ノ/ワ} ジョーセキ　キタ。（あ、タクシーちゃんと来た。）
	b.	家に遊びに来てくれた友人が帰宅する。タクシーを呼んだが、友人はそのことをすっかり忘れてバスの時刻表をみながら「いつのに乗ろうかな」と話している。（活性化なし）
		ハイヤー{ノ/ワ}　キタ。（タクシー来た。）

Shimoji & Hirosawa（2022）

- 主題構造でなくても、主語が活性化していれば「ワ」を取れる。

2つの条件の提示（廣澤 2023a, b、廣澤他 近刊）

文焦点（Thetic）文で主題助詞が出現する2つの条件

① 主語が文脈に既出のとき

(5)	a.	不意に来たタクシーを見て（New）
		ハイヤー{ノ/*ワ}　来タゼ。（タクシー来たよ。）
	b.	呼んだタクシーを待っていて、見つける（Old）
		ハイヤー{ノ/ワ}　来タゼ。（タクシー来たよ。）

2つの条件の提示（廣澤 2023a, b、廣澤他 近刊）

文焦点（Thetic）文で主題助詞が出現する2つの条件

②存在（Presentational）ではなく
出来事を表す（Event-reporting）文のとき

(11)	a.	山道で急に信号を見つける（Presentational）
		信号{ノ/*ワ}　アッタフー。　（信号があったよ。）
	b.	山道で急に倒れた信号を見つける（Event-reporting）
		信号{ノ/ワ}　　倒レトルフー。（信号が倒れてるよ。）

＊文焦点（Thetic）をPresentationalとEvent-reportingに区分するのはLambrecht（1994:144）による（Sasse1987も同様の分類を提案）。

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

主題助詞が出現する2つの条件（再掲）

① 主語が文脈に既出のとき（New vs. Old）

② 存在ではなく出来事を表す文
（Presentational vs. Event-reporting）

これらを掛け合わせたクロスモデルを考える。

	Presentational	Event-reporting
New		
Old		

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

述語焦点（Categorical Sentence）まで拡張

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New			
Old			

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

述語焦点（Categorical Sentence）まで拡張

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	(12)		
Old			(13)

(12)　「信号があるよ！」（Presentational/New）

(13)　（「信号どうなった？」と聞かれて）「信号は倒れてるよ。」（Categorical/Old）

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

諸方言の助詞の分布が階層として示せる

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	⇨	⇧
Old	⇩	⇦	主題

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

諸方言の助詞の分布が階層として示せる

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	⇨	⇧
Old	⇩	⇦	主題

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

階層は分布を予測する。

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格		
Old		主格	主題

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

階層は分布を予測する。

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	主格	
Old	主格	主格	主題

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

予測しないパターン

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	主格	主題
Old	主題	主格	主題

「飛び地」のような分布はしない

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

諸方言の助詞の分布が階層として示せる

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	⇨	⇧
Old	⇩	⇦	主題

「飛び地」のような分布はしない

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

諸方言の助詞の分布が階層として示せる

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	⇨	⇧
Old	⇩	⇦	主題

尾前方言（主格：ノ, 主題：ワ）

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	主格・主題	主題
Old	主格・主題	主格・主題	主題

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

諸方言の助詞の分布が階層として示せる

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	⇨	⇧
Old	⇩	⇦	主題

標準語（主格：が, 主題：は）

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格・Ø	主格・Ø	Ø
Old	Ø	Ø	主題・Ø

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

諸方言の助詞の分布が階層として示せる

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	⇨	⇧
Old	⇩	⇦	主題

鹿児島県いちき串木野方言（主格：ガ, 主題：ワ）

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	主格	主格・主題
Old	主格・主題	主題	主題

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

諸方言の助詞の分布が階層として示せる

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	⇨	⇧
Old	⇩	⇦	主題

ここまでのまとめ

- 尾前方言では文焦点（Thetic）でも主題助詞が出ることがある。

- 2つの条件
  ①主語が文脈に既出のとき
  ②存在ではなく出来事を表す文のとき

- この条件をもとに「情報構造のクロスモデル」を提案した
  - 他方言での主題助詞の出現条件も統一的に整理できる

	P	E	C
N	主格	⇨	⇧
O	⇩	⇦	主題

ここまでのまとめ

- 尾前方言では文焦点（Thetic）でも主題助詞が出ることがある。

- 2つの条件
  ①主語が文脈に既出のとき
  ②存在ではなく出来事を表す文のとき

- この条件をもとに「情報構造のクロスモデル」を提案した
  - 他方言での主題助詞の出現条件も統一的に整理できる

	P	E	C
N	主格	⇨	⇧
O	⇩	⇦	主題

3.条件①の拡張

条件①おさらい

主語が文脈に既出のとき、主題助詞が現れうる。

(5)	a.	不意に来たタクシーを見て（New）
		ハイヤー{ノ/*ワ} 来タゼ。（タクシー来たよ。）
	b.	呼んだタクシーを待っていて、見つける（Old）
		ハイヤー{ノ/ワ} 来タゼ。（タクシー来たよ。）

⇨New/Oldの基準が「文脈に既出」で良いか、疑わしい例が出てきた。

話し手の念頭にある指示対象

- 文脈に既出ではない。

- 探索の文脈

(14)	種を買いたいと思って農協に行き、種を見つける。
	コケー　種{ノ/ワ}　アッタフー。（ここに種あった。）

話し手の念頭にある、という意味で旧情報

一旦忘れられた指示対象

- 文脈に既出でも、現在念頭にあるわけでもない。

- 呼び止めの文脈

(7)	b.	足元に聞き手の筆箱を見つけて呼び止める
		アレ　筆入レ{ノ/ワ}　アル。（あれ、筆箱がある。）

かつてあった注意をリセットしている、という意味で旧情報

呼び止め文脈の制限

- 聞き手の所有物等である必要がある。

(7)	b.	足元に**聞き手の**筆箱を見つけて呼び止める
		アレ　筆入レ{ノ/ワ}　アル。（あれ、筆箱がある。）
	c.	足元に**誰かの**筆箱を見つけて
		アレ　筆入レ{ノ/*ワ}　アルガ　ワレガトカイ。 （あれ、筆箱があるけど、あなたの？）

聞き手が探しているように見立てられる

- 文脈に既出でも、念頭にあるわけでも、忘れたわけでもない

- 「申し出」文脈（「～ならあるよ」）

(15)	（書類を書かないといけない人に）

筆箱{ワ/ノ}　アルガ　貸ソーカ？
（筆箱あるけど、貸そうか？）

(16)	（書いている書類が飛んでいきそうになっている人に）

筆入レ{ワ/ノ}　アルガ　使エバ？
（筆箱あるけど、使えば？）

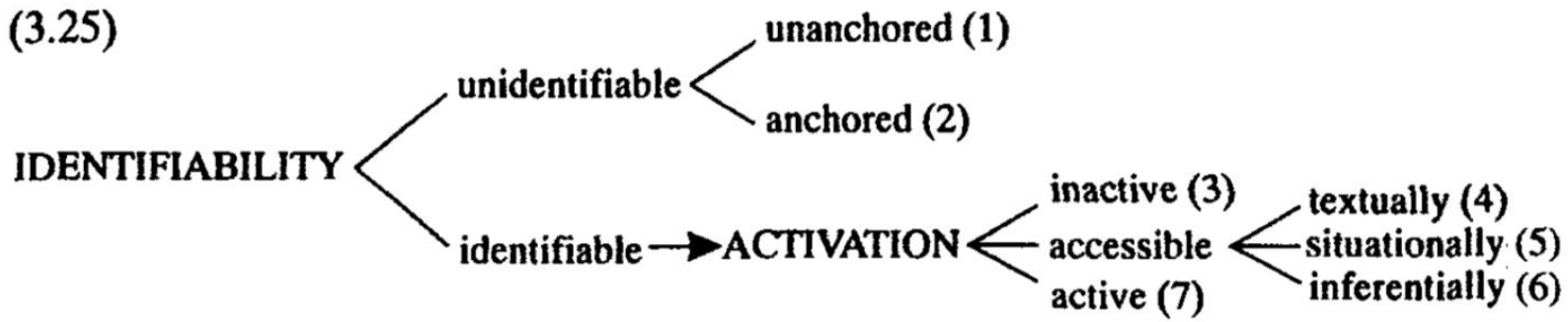
聞き手が探しているかのように見立て、旧情報扱い

「旧情報」をどこまで拡張すべきか

- 談話に既出（言及されている）・・・従来
- 話し手（or聞き手）の念頭にある・・・(14)
- 聞き手の意識に一度登って忘れられた・・・(7)
- 聞き手の念頭にあるかのように見立てられる・・・(15), (16)←談話上の方略

- 旧情報/新情報の細分化(Chafe1987, **Prince1981, 1992, Lambrecht 1994 .etc**)

＊図は**Lambrecht (1994: 109)**



条件①の拡張

- 「旧情報」をどこまで拡張すべきか
  - 談話に既出（言及されている）・・・従来
  - 話し手（or聞き手）の念頭にある・・・(14)
  - 聞き手の意識に一度登って忘れられた・・・(7)
  - 聞き手の念頭にあるかのように見立てられる・・・(15), (16)←談話上の方略

課題：どのように分類し、どう客観的に統制するか？

4.条件②のアスペクト制限

条件②

存在（Presentational）ではなく出来事を表す（Event-reporting）とき、主題助詞が出現可能

(11)	a.	山道で急に信号を見つける（Presentational）
		信号{ノ/*ワ}アッタフー。　（信号があったよ。）
	b.	山道で急に倒れた信号を見つける（Event-reporting）
		信号{ノ/ワ}　倒レトルフー。（信号が倒れてるよ。）

条件②のアスペクトの制限

- 述語のアスペクトが進行相の文は（7a）、Event-reportingでも主題助詞を取れない。

(7)	a.	電話が鳴ったので家人に伝える（進行相）
		電話{ノ/*ワ}　鳴リウォルゴタルガ。（電話が鳴ってるみたいだよ。）
	b.	時計が止まっているので家人に教える（結果相）
		時計{ノ/ワ}　止マットルフー。（時計が止まってるようだよ。）

条件②のアスペクトの制限

擬似ミニマル・ペア

(17)	a.	夜寝ていると、ポタポタと水が漏れる音が聞こえる（進行相）
		アラ　ドッカ　水{ノ/*ワ}　ボリオルゴタルガ。 （あら、どこか水が漏れているようだ。）
	b.	洗面台に溜めた水がなくなってしまってるのに気づく（結果相）
		アラ　水{ノ/ワ}　ボットルガ。 （あら、水が漏れている。）

5. モデルの再提案

情報構造のクロスモデル（廣澤2023a, b、廣澤他近刊）

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New			
Old			

Event-reportingを更に二分割

- Event-reporting文は進行相と結果相で振る舞いが異なる。

	P	E	C
N			
O			

		進行	結果	
	P	E	E	C
N				
O				

Event-reportingを更に二分割

- Event-reporting文は進行相と結果相で振る舞いが異なる。

	P	E	C
N			
O			

→

		進行	結果	
	P	E	E	C
N				
O				

- 主格助詞と主題助詞の分布の階層（再掲。p.24）は以前保たれる

	P	E	C
N	主格	⇨	⇧
O	⇩	⇦	主題

→

		進行	結果	
	P	E	E	C
N	主格	⇨		⇧
O	⇩		⇦	主題

Event-reportingを更に二分割

- 尾前方言の主語標示

		進行	結果	
	P	E	E	C
N	主格	主格	主格・主題	主題
O	主格・主題	主格・主題	主題	主題

- 主格助詞と主題助詞の分布の階層（再掲。p.24）は以前保たれる

	P	E	C
N	主格	⇨	⇧
O	⇩	⇦	主題

→

		進行	結果	
	P	E	E	C
N	主格	⇨		⇧
O	⇩		⇦	主題

Event-reportingを更に二分割

	P	E（進行）	E（結果）	C
N	主格	主格	主格・主題	主題
O	主格・主題	主格・主題	主題	主題

Event-reporting/New（再掲）

(7)	a.	電話が鳴ったので家人に伝える（進行相）
		電話{ノ/*ワ}　鳴リウォルゴタルガ。（電話が鳴ってるみたいだよ。）
	b.	時計が止まっているので家人に教える（結果相）
		時計{ノ/ワ}　止マットルフー。（時計が止まってるようだよ。）

Event-reportingを更に二分割

	P	E（進行）	E（結果）	C
N	主格	主格	主格・主題	主題
O	主格・主題	主格・主題	主題	主題

Event-reporting/Old

(18)	a.	水が漏れていた箇所を自分で塞いでみた。今晩は大丈夫かと耳を澄ませてみると、やはり水の漏れる音が聞こえる。（進行相）
		ヤッパ　マーダ水{ノ/ワ}　ボリオルフー。 （やっぱりまだ水が漏れているようだ。）
	b.	栓の欠けたところを接着剤で塞いで、もう一回水を張ってみる。10分くらいしてもう一度見に行ってみる（結果相）
		ヤッパ　水{*ノ/ワ}　ボットルガ。 （やっぱり水が漏れている。）

他方言での並行的な現象（発表者フィールドデータ）

- 南琉球宮古語与那覇方言

ヌ：主格助詞, ヌドゥ：主格助詞＋焦点助詞
ワ：主題助詞（母音/i/のあとはヤで実現）

与那覇方言		進行	結果	
	P	E	E	C
N	ヌドゥ	ヌ/ヌドゥ	ヌドゥ/ワ	ワ
O	不明	ヌ/ヌドゥ	ワ	ワ

Event-reporting/New

(19)	a.	電話がかかってきた。家人に伝える（進行相）
		電話{ヌ/ヌドゥ/*ワ} ナリュー。（電話鳴ってる）
	b.	ふと時計を見上げると，針が進んでいない。家人に伝える（結果相）
		時計{*ヌ/ヌドゥ/ヤ} トゥマリドゥウー。（時計止まってる）

他方言での並行的な現象（発表者フィールドデータ）

- 南琉球宮古語与那覇方言

ヌ：主格助詞, ヌドゥ：主格助詞＋焦点助詞
ワ：主題助詞（母音/i/のあとはヤで実現）

与那覇方言		進行	結果	
	P	E	E	C
N	ヌドゥ	ヌ/ヌドゥ	ヌドゥ/ワ	ワ
O	不明	ヌ/ヌドゥ	ワ	ワ

Event-reporting/Old

(20)	a.	奥さんが電話を待っている。電話がかかってきた（進行相）
		電話{ヌ/ヌドゥ/*ワ} ナリュー。（電話鳴ってる）
	b.	今何時か隣の部屋に見に行ってくれと頼まれ、隣の部屋に見に行くと、針が進んでいない（結果相）
		時計{*ヌ/*ヌドゥ/ヤ} トゥマリドゥウー。（時計止まってる）

アスペクトによる分割はなぜ生じるか

- 日本語学の文類型、特に叙述類型論（益岡1987）の視点から
  - 益岡（1987）の、事象叙述 vs. 属性叙述
  - 佐久間（1941）や寺村（1973）の、物語文 **vs.** 品定め文
  - 三尾（**1948**）や仁田（**1991**）の、現象文 **vs.** 判断文

事象叙述 ⟷ 属性叙述

花子が走った。
犬が泳いでいる。

花子は学生だ。
犬は可愛い。

主格　　**主題**

叙述類型と時間性

- 時間の推移によって展開するか否かと、
  主格「が」 vs. 主題「は」の交替が連動する（影山2009, 2012：iv）

一時的

事象叙述

花子が走った。
犬が泳いでいる。

主格

属性叙述

花子は学生だ。
犬は可愛い。

主題

永続的

叙述類型論が予想すること

時間的展開の有無と主格/主題交替が連動するなら、

- より一時的な進行の方が主格を取りやすい
- より永続的な結果の方が主題を取りやすい

一時的

P	E（進行）	E（結果）	C
花子がいる	花子が泣いている	花子は卒業している	花子は女だ

永続的

主格

主題

叙述類型論が予想すること

時間的展開の有無と主格/主題交替が連動するなら、

- より一時的な進行の方が主格を取りやすい
- より永続的な結果の方が主題を取りやすい

→尾前方言は実際にそうなった。

一時的

	P	E（進行）	E（結果）	C
N	主格	主格	主格・主題	主題
O	主格・主題	主格・主題	主題	主題

永続的

主格　　主題

情報構造のクロスモデル　再提案まとめ

- 情報構造のクロスモデルの横方向の分類を細分化

	P	E	C
N			
O			

→

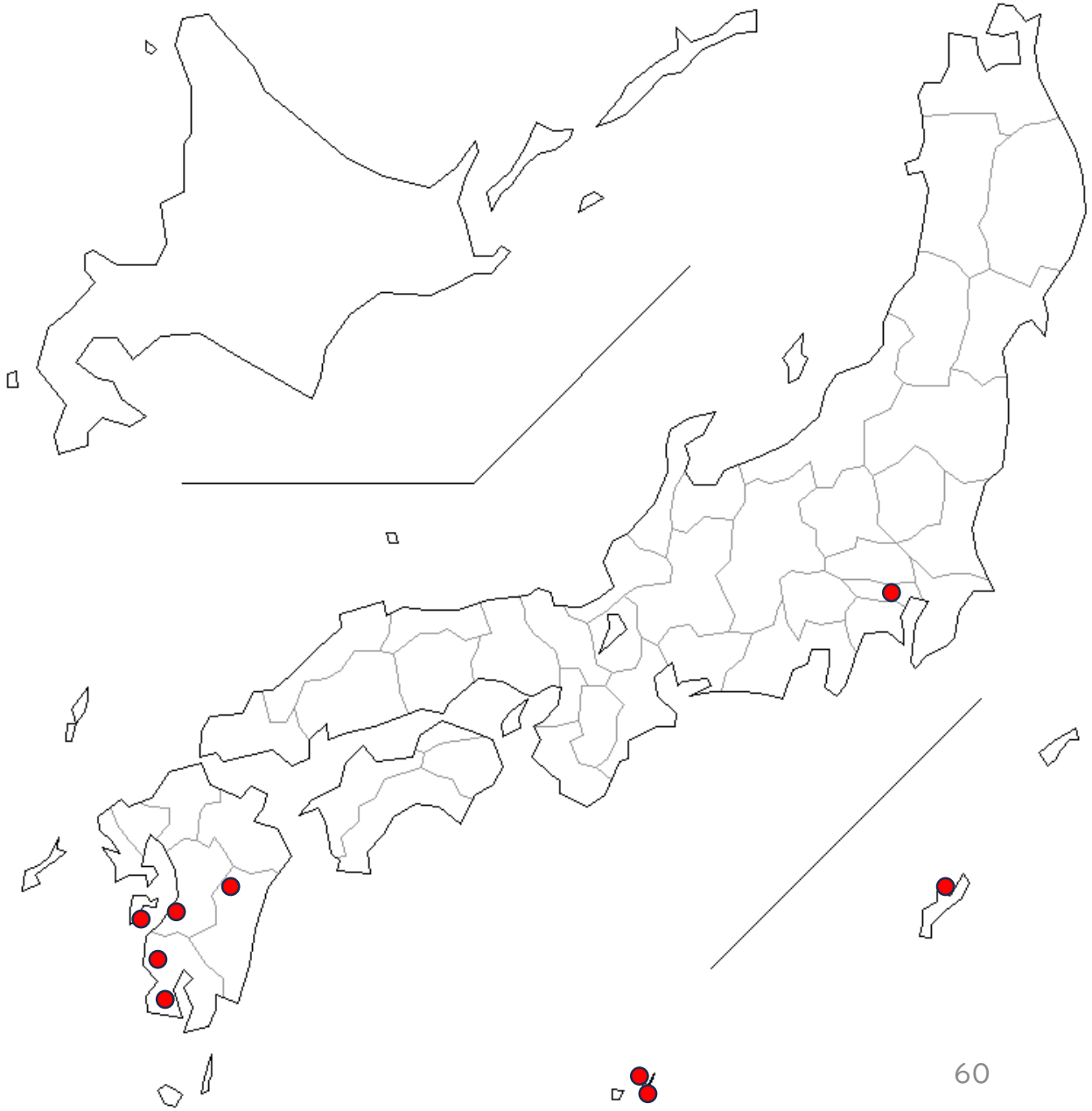
	P	E（進行）	E（結果）	C
N				
O				

- 尾前方言、与那覇方言の記述がより適切になる。
- 叙述類型論の観点からも妥当な細分化。
- 他方言での検証も必要

6. おわりに

今後の調査計画

- 「情報構造のクロスモデル」を仮説とし、日琉諸方言での主語の標示に関わる情報構造的条件を調査、類型化
- 日本語4～6方言、琉球4方言程度を先行地域としたい
- ぜひ調査にご協力を！



まとめ

参照文献

✓尾前方言は文焦点（Thetic）文の一部で主語が主題助詞を取る

✓従来の主張（①か②のいずれかを満たすとき主題助詞が出現）

①主語が文脈に既出のとき

②存在（Presentational）ではなく出来事を表す（Event-reporting）文

✓本発表で明らかにしたこと

① の条件は拡張すべき（多様な「旧情報」）

②にはアスペクトの制限がある（進行 vs. 結果）

✓情報構造のクロスモデルの修正（アスペクトによる分割）

各地の話者の皆様に感謝申し上げます。本発表はJSPS科研費23KJ1712の助成を受けています。

参照文献

Chafe Wallace（1984）Cognitive constraints on information flow. In Tomlin Russell S (ed.) Coherence and grounding in discourse. 22–51. Amsterdam: John Benjamin.

Haspelmath, Martin（2003）The geometry of grammatical meanings: Semantic maps and crosslinguistic comparison. In: Michael Tomasello (ed.) The New Psychology of Language 2: 211–242. Lawrence Erlbaum Associates.

廣澤尚之（2023a）「宮崎県椎葉村尾前方言における情報構造」修士論文, 九州大学.

廣澤尚之（2023b）「Thetic vs. Categoricalの対立におけるEvent-reporting 文の位置付け： 日本語諸方言における主題助詞・主格助詞の出現と韻律句形成から」日本言語学会第166回大会.

廣澤尚之・松岡葵・下地理則（近刊）「方言変異からみる「ハもガも使えない文」—宮崎椎葉尾前方言，鹿児島串木野方言，標準語の対照を通して」竹内史郎・下地理則・小西いずみ（編）『日琉諸語における情報構造と文法現象』東京：ひつじ書房.

影山太郎（2009）「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136: 1-34.

影山太郎（2012）「まえがき」影山太郎（編）『属性叙述の世界』ⅰ-ⅹⅲ. 東京：くろしお出版.

Kuroda, Shige-Yuki (1972) The categorical and the thetic judgement evidence from Japanese syntax. Foundations of Language 9 (2): 153-185.

Lambrecht, Knud (1994) Information structure and sentence form: Topic, focus and the mental representations of discourse referents. Cambridge: Cambridge university press.

Lambrecht, Knud (2000) When subjects behave like objects: An analysis of the merging of S and O in sentence-focus construction across languages. Studies in Language 24:3. 611-682.

Macías, Jose Hugo Garcia (2016) From the Unexpected to the Unbelievable-Thetics, Miratives and Exclamatives in Conceptual Space. PhD dissertation, University of New Mexico.

益岡隆志（1987）『命題の文法　日本語文法序説』東京：くろしお出版.

三尾砂（1948）『国語法文章論』東京：三省堂.

三井桃子（2020）「宮崎県椎葉村尾前方言における主題標示の再検討—標準語との対照を通して—」九州大学卒業論文.

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房.

尾上圭介（1987）「主語に「は」も「が」も使えない文について」『国語学』150: 48.

大谷博美（1995）「ハとガとø」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上）』287-295. 東京：くろしお出版.

Prince, Ellen F (1981) Towards a taxonomy of given-new information. In: Peter Cole (ed) Radical Pragmatics, 223-255. New York: Academic Press.

Prince, Ellen F (1992) The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information-status. In: William C. Mann and Sandra A. Thompson (eds.) Discourse Description: Diverse linguistic analyses of a fund-rasing text, 295-325. Amsterdam: John Benjamins.

佐治圭三（1991）『日本語の文法の研究』東京：ひつじ書房.

佐久間鼎（1941）『日本語の特質』東京：育英書院.

Sasse, Hans-Jürgen (1987) The thetic/categorical distinction revisited. Linguistics 25: 511–580.

Sasse, Hans-Jürgen (2006) Theticity. In: G. Bernini & M. L. Schwarz (eds.) Pragmatic organization of discourse in the languages of Europe. Berlin: Mouton de Gruyter.

Sax, Daniel J (2012) Not quite 'out of the blue'? Towards a dynamic, relevance-theoretic approach to thetic sentences in English. In: Piskorska, Agnieszka (ed.), Relevance Studies in Poland. 4, 24-53. Warsaw: Warsaw University Press.

下地理則（2019）「現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性」『日本語の格標示と分裂自動詞性』1-36. 東京：くろしお出版.

Shimoji, Michinori and Naoyuki Hirosawa (2022) Shiiba (Western Japanese). In: Michinori Shimoji (ed.) An Introduction to the Japonic Languages: Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages. 293-329. Leiden: Brill.

寺村秀夫（1973）「感情表現のシンタクスー「高次の文」による分析の一例ー」」『月刊言語』2-2. 東京：大修館書店